



ゴールドマン・サックス・ギブズ・コミュニティ支援プログラム「進学支援プロジェクト」元東京ヤクルトスワローズ監督の古田敦也さんが児童福祉施設の中学・高校・大学生たちに、自分の人生をどう切り開いてきたかを語ってくれた。

企業と
地域が つながるとき

子どもたちの 将来のために

～児童福祉施設と企業、NPO、
ボランティアをつなぐ試み～

TVACと児童福祉施設との関係

東京ボランティア・市民活動センター(以下、TVAC)は、ボランティアやNPOといった市民たちの主体的で営利を目的としない社会貢献活動(「市民活動」)を推進・支援することを目的とし、1981年に設立され、社会福祉法人東京都社会福祉協議会(以下、東社協)が運営しています。そして、東京都の児童養護施設、自立援助ホーム¹⁾、母子生活支援施設²⁾等の児童福祉施設は東社協の会員であり、児童部会、母子福祉部会といった施設種別の連絡会が組織されています。

このため東社協ではいろいろな形で児童福祉施設をサポートしています。例えば、東京善意銀行という部署では、企業や団体、個人からの寄付や招待事業を児童福祉施設と調整しており、また、別の部署では各種奨学金や貸付事業を運営し、児童福祉施設の子どもの進学を支援しています。一方、TVACでは各区市町村にあるボランティア(市民活動)センターとの連携のもと、ボランティアを紹介したり、企業やNPOの支援を児童福祉施設につないでいます。

今号では、TVACが企業各社と協働プロジェクトを実施し、子どもを支援するNPOと連携しながら、児童福祉施設の子ど

もたちの自立支援に取り組んできた事例をいくつかご紹介します。次号からは、各プロジェクトについてより詳しくお伝えしていく予定です。

社員のボランティア活動から進学支援へ

ゴールドマン・サックスの社会貢献の担者が本センターにいらして、児童養護施設で『サンタ・プロジェクト』という活動を実施したいとのご相談をいただき、いくつかの施設をご紹介させていただいたのは、今から10年前(2002年)のことです。

このプロジェクトは、施設の子どもたち一人ひとりにクリスマス・プレゼントの希望を聞き、社員ボランティアが一人ひとりの子どもたちのサンタになるといいます。社員の方々は忙しい仕事の合間を縫って、子どもたちのプレゼントを買いに行き、ラッピングも工夫しながら、その子に合ったメッセージ・カードを作ります。施設でのクリスマスのイベントに参加できる社員は、直接プレゼントを届けます。子どもたちはプレゼントもさることながら、社員との交流やメッセージ・カードも喜んでいくようです。

他にも、ゴールドマン・サックスにはC TW(コミュニティ・チームワーク)というボランティア・プログラムがあり、社

員は付与される1日ボランティア休暇を使つて、地域での様々な社会貢献活動に積極的に取り組んでいます。施設の子どもたちに対しては、フットサルでの交流や、キャリア・メンタリング（進路や仕事についてのアドバイス）の実施などの継続した支援を行っています。

こうしたボランティア活動を通して社員の方が気付いたのが、児童福祉施設の子どもの進学についての課題でした。施設の子どもたちが大学等に進学するための資金が行政や既存の助成だけでは十分ではなく、アルバイトを掛け持ちしながら大学に通うことが多いのが実情です。勉強したり、サークル活動に参加する余裕がなく、突然の一人暮らしで孤独や不安を抱えてしまうこともあります。

そこで2010年に始まったのが、ゴールドマン・サックス・ギブズ・コミュニティ支援プログラム『進学支援プロジェクト』です。このプロジェクトでは、4年制大学への進学を希望する児童福祉施設の子どもたちを対象に、選考を行った上でその学費全額と生活資金の一部を助成します。また、TVACのケースワーカーと施設職員が連携をとりながら、アフターケアを行っています。

さらに、進学を希望し、選考を通った高校生2・3年生に対しては、塾代の助成を

し、中学生・小学生に対してはNPO法人JAMネットワークやNPO法人キッズドアと連携しながら、コミュニケーション力を高めるワークショップや学習支援を各施設で実施しています。

ITを活用した就労支援

2011年には、日本マイクロソフト株式会社（以下、MS社）とTVACとの協働プロジェクトとして『自立UPプロジェクト』を実施しました。これは、都内の児童養護施設と自立援助ホームの子どもたちを対象として、ITスキル講習と就労支援イベントを開催し、就労を支援しようというものです。震災前の2月に東京都の全施設に呼びかけたところ、締切日前に定員を超える21施設が応募してくるという反響でした。MS社もTVACも被災地支援に取り組みながら、本プロジェクトを立ち上げました。

ITスキル講習では、各施設の職員を対象として、ITスキルの教え方についての研修を3日間実施。ここで学んだことをもとに「パソコン基礎&セキュリティ」「インターネット&電子メール」「Word」「Excel」「PowerPoint」の5講座（32時間）を各施設において、職員が子どもたちに教えました。希望する施設にはMS社の社員

ボランティアやNPO法人3keysのボランティアがサポートに入っています。施設職員も子どもたちも、ボランティアも、非常に多忙な中でしたが、最終的にはトータル100名（実数）を超える子どもたちが本講習を受講しました。

また、就労支援イベント『おしごと・カフェ』を品川にあるMS社のセミナールームを会場として3回実施しました。カラフルで機能的なオフィスも案内していただき、子どもたちは大喜びでした。講師には、株式会社フェアスタートやNPO法人エンジェルサポートセンター、MS社の社員ボランティアの皆さん、施設OBの方々、企業の社長の皆さんにご協力いただき、子ど



日本マイクロソフト株式会社「自立UPプロジェクト」各施設で子どもたちにITスキルを教えようと、21施設の職員の方々が3日間のIT講師養成研修を受講した。

もたちとのグループ・ディスカッションも大変盛り上がりました。

本プロジェクトでは、参加施設に対して、再生PCやオリジナルテキスト等を寄贈するとともに、参加していない施設のために本プロジェクトや就労支援についての情報を掲載したポータルサイトを作成しています。

去る3月31日には、MS社において、協力者の皆さんと一緒にITスキル講習の修了式を開催しました。32時間の5講座を全て修了した子どもには『修了証』をMS社とTVACからお渡ししてその努力を称え、さらなるITスキルの向上を支援するため、マイクロソフト・オフィス・スペシャリストの資格取得のための試験問題集をプレゼントしました。また、ITスキル講習を講師として実施した施設職員の方々には、感謝の気持ちとして『功労賞』の賞状をお渡ししました。

子どもたちに多様な機会を提供

2008年、TVACはスイスを拠点とする世界的な金融機関であるUBSグループと一緒に、『多様な子どもたちの架け橋プロジェクト』を開始しました。支援対象は、各種統計調査やインタビューに基づき、東京エリアで厳しい状況にあると考えられ

る4つの背景をもつ青少年。すなわち、①児童養護施設の子どもたち、②低所得の母子家庭の子どもたち、③障害のある子どもたち、④多文化・外国にルーツのある子どもたちです。

本プロジェクトでは、それぞれのグループの子どもたちのニーズに合ったイベントやプログラムを通して、子どもたちが積極的に社会に参加していくことを支援しています。つまり、子どもたちに対しては、様々なチャレンジの機会を提供し、成功体験を積み重ねることで自信を高めたり、多様な人々と出会い、協力することの大切さを学んでいます。

また、プロジェクトの実施にあたっては、コミュニティ・パートナー（協力団体）と呼ばれるNPOや児童福祉施設と連携しており、それらの団体のスタッフに対しては、キャパシティ・ビルディング（能力向上）研修を提供。さらに、プロジェクト評価も協力団体、UBS、TVACが一緒に企画・実行しています。

特に児童養護施設については、東京都の62児童養護施設のうち、支援が比較的届きにくい都外の2施設を継続的に支援しています。年間を通じて社員ボランティアが施設を訪れ、子どもたちやスタッフのリクエストに応じながら、BQサイトや花壇づくり等の環境整備を行ったり、スポーツ、



UBS『多様な子どもたちの架け橋プロジェクト』
多様な背景や個性をもつ高校生たちが、いろいろな活動にチャレンジしながら、チームワークとリーダーシップを学んでいる。

学習支援、イベントなどを通して、子どもたちの持っている力をひきだしています。また、UBSの持つさまざまなリソースやネットワークを活用し、プロゴルファーの指導によるゴルフ体験、F3（カーレース）の見学、モダンアートの鑑賞、グローバル金融について学ぶオフィスツアーなど、ふだんなかなかできない経験を提供することによって、子どもたちの興味・関心や世界が広がっているようです。

3年前より、上記の4グループから10名程度の青少年（主に高校生）を集め、1年間のリーダーシップ養成プログラム『ユ一

ス・チーム・チャレンジ（YTC）」を実施しています。参加者は互いの多様性を受けとめながら、コミュニケーション力を高め、チームでイベントを企画・実施していきます。また、社員がボランティアとして長期にわたりサポートしており、子どもたちにとって社会人のロールモデルになっているようです。1年目、2年目のYTCの参加者は、高等教育に進学したり、就職しましたが、YTCの後輩や社員ボランティアに会いに来て、近況報告をしたり、交流しながら、息の長い支援プロジェクトに成長しています。

施設と支援者がつながるために

以上の事例からもわかるように、企業はいろいろなリソースをもち、多様な形で児童福祉施設を支援することができます。まずは、人材、つまり、仕事の経験や専門知識、スキルをもつ社員です。スポーツや遊びを通しての交流や学習支援もよいですし、子どもたちに仕事や生き方、ITスキル、外国語、コミュニケーション、チームワーク、社会でのマナーなど、いろいろなことを伝えることができるでしょう。一方、社員たちも子どもたちの優しさや強さ、素晴らしき可能性に気がついていきます。こうした、両者のよい出会いが、子どもたちの世界を

広げ、成長につながっていくことになるでしょう。また、社員が児童福祉施設のことをより深く理解することによって、多様な支援に発展していくかもしれません。

しかし、企業が児童福祉施設を支援する場合、いくつかの課題があります。

まず1つめは、連絡が取りにくいということです。施設職員の方々は子どもの対応で忙しく、シフト制もあり、PCも共有であつたりするので、すぐに返信するのは大変です。また、グループホーム³が本舎とは別のところにある場合は施設内の情報伝達がより難しくなります。

2つめは、子どもたちとの関係づくりです。子どもたちは学校やクラブ活動、アルバイトで忙しかったり、あるいは、障害があつたり、心が不安定な状況にある場合もあるのです。企業が提供する支援プログラムに参加できなかつたり、参加しても上手くコミュニケーションできないこともありま

す。こうした施設や子どもたちの状況を企業等の支援者に理解してもらうためには、両者をつなぎ、よい関係づくりを支援するコーディネーターの存在が重要です。今年度から東京都の児童養護施設に配置されることになった「自立援助コーディネーター」に期待したいところですし、また、企業の社会貢献・CSR担当やボランティア（市

民活動）センター、NPOのコーディネーターの向上も必要でしょう。

児童福祉施設の子どもたちが、将来、自分の力で人生を歩んでいけるために、施設職員と支援者が協力しながら、子どもたち一人ひとりの個性や成長のスピードにあわせた支援を行うことが求められているのではないのでしょうか。

河村暁子（東京ボランティア・市民活動センター）

*1 児童養護施設・自立援助ホーム

東京都には62か所の児童養護施設があり、定員は3210名（平成23年4月現在）となっている。また、都内には18か所の自立援助ホームがある（平成23年4月現在）。

*2 母子生活支援施設

母子家庭で児童の養育が十分にできない場合、母子をともに入所させて保護し、自立促進のための生活支援を行う施設。東京都内には37か所の母子生活支援施設があり、754世帯が暮らしている（平成23年4月現在）。

*3 養護児童グループホーム

児童養護施設に入所する児童のうち6人程度の児童を施設から独立した家屋において、家庭的な雰囲気の中で養育する制度。都内には123か所の養護児童グループホームがある（平成23年4月現在）。

*1～3については、『2011 社会福祉の手引』（東京都発行）より引用・参考。